

## 話すこと・聞くこと

松井 とし

研究会などで与えられたテーマについて話し合いを深める時、小グループになってバズ・セッションすることがいろいろな場で取り入れられ、定着した感がある。だが、いざ話し始めると思いが先に立つのか話が長くなり、最終的に話し手自身にも話したいことが何であったのかよく分からなくなってしまったりすることがある。また司会者や記録者の聞きとり方によっては、分科会から全体会へ返す内容がグループ内の話し合い全体の流れや主旨を反映していないこともある。

保育者としては子どもたちの「話す・聞く」機会を大切に、環境づくりで心を砕いている私たちが、さて自分たちのこととなるとあまりにも日常的なこととして、「話すこと」や「聞くこと」を安易に考えてしまっていないだろうか？ 従来の教育では教え込む教育が基本であったために、対話とか討論とかに重点がおかれていなかった、そのため自

分の考えていることを簡潔にかつ正確に表現することが苦手だ、とする指摘がある。

豊かな人間関係をつくり出し、楽しく学校生活に取り組めるようになることを目指して、H市の小学校では「話す・聞く」のロールプレイを試みた。低学年の子どもたちも歌遊びや身体表現、ゲーム等のウォーミングアップの後、二人一組でテーマについて三分から五分「話す役割」「聞く役割」を取り、話し合う。相手の気持ちになって聞くこと、相手をからかったり否定したりしないことを努力目標として話を聞いた後、聞き手と話し手の役割を交代する。このロールプレイをした後、子どもたちは『私の話をよく聞いてくれたので安心した』『話す時に緊張した』『いつもと違う人と話せた』『いろいろな考えがあって楽しい時間だった』『相手から聞いたことがうまく伝えられるか心配だったが、ここにこしてくれたので良かった』などと感想を述べている。

自分の考えをまとめ、相手によく分かるように話すことは難しい。保護者からの相談に応じるときの基本のあり方、「傾聴」はさらに難しい。教師と言われる人たちはまことに聴き下手で、一〇分間と黙って聞いていられないのだそうだ。良き話し手、良き聴き手となるために、さらに保育者としての感性を高めるために、園内研修等で「話すことと、聴くこと」に正面から取り組むことが必要なのではないだろうか。

(元・幼稚園教諭)